

結婚記念の木

この頃の結婚は殆ど恋愛結婚だ。私達の兄弟六人でも、恋愛は一人だけ、妻の兄弟では八人の内、恋愛は三人だけ、ほかは仲人のお世話になり結婚した。

私達の結婚は私の父が妻の父と懇意だったので、決めてくれた。父は私が船から休暇で帰ってくると、毎回のように「いい娘さんを見立ててあるから、一人で見つけては駄目だぞ」と口癖のように言っていた。

妻の生家とは一里半（約六キロ）位離れているが、父は時々行く。八人兄弟で、上から四人は女で妻は三女である。あの当時は小学校を卒業して、上の学校に進むのは級で二、三人しかいない。高校は十五キロ位離れている、妻はバス通学だったが、姉と妹は自転車だった、バス停までは徒歩二十分程だ。

学校から帰ってくると、すぐセーラー服を脱ぎ、農作業衣に着替え両親の手伝いに田畑に行く。父は何時も見ていて感心し、私の嫁にと思っていたようだ。

私の生家の近くに、跡継ぎ（子供）の居ない夫婦が居て、その農家に父は結婚したばかりの、ある農家の次男坊を寄せ家督（養子）に縁組させ、立派に家業は繁栄していた。父はその夫妻に私達の仲人をお願いした。

結婚式は私の時代頃まで、旧態依然の様式だった。先に嫁の生家で婿も交じり、仲人、嫁添い、婿添い、親族、親族の長老が司会にて、嫁方の酒盛りを始める。婿の食い逃げと言つて、縁側から一足先に徒歩で生家に帰る。

嫁も徒歩だが、遠ければ馬や荷車で部落の入り口で降り、長持ち歌をデッカイ声で歌いながら、着飾った角かくし高島田の姿を部落の人々に見てもらい、祝福され婚家に着く。婚家の庭先で一段と声をはりあげ、長持唄を披露する。

婚家では玄関から草履に履き替えて入り、両親に挨拶し、お茶を点れ差しあげて飲んで戴き、仏前に進み、先祖の靈に線香をあげ結婚を報告する。式場は部屋を全部打ち抜き、正面に親族の長

老、仲人、両側に嫁添い、婿添い、双方の親戚が嫁、婿を真ん中にして向い合い席に着く。今度は婿方の長老が司会者になり簡単な挨拶をする。妻は正面にいる私の顔は見えなかったそうだ。私も記憶に無い。現代の式のような祝辞などは無く、早速酒盛りが始まる。

一時間ほど過ぎた頃、嫁と婿は退散、襖一枚の隣部屋で、床入りの儀式が、嫁添い、婿添い夫婦によつて行われる。寝間着に着替えさせられ、一枚蒲団に向かい合つて座らされ、固めの盃を交わす。終わつて一つ蒲団に寝せられ、蒲団を掛けて呉れ、上から軽く押さえ、変な言葉を言つて出ていく。襖一枚の式場は飲めや歌えのドンチャン騒ぎである。私達の時は誰だかが襖を開け「オツと間違つた」と言い、すぐ閉めた。本当に間違つたのか、余興なのか、慣例なのか、聞いて見なかった。

翌朝早く起き、二人で餅を搗く習慣だ。新郎は杵を持ち、新婦は合い取りだ。大きな臼で四、五升の量だった。杵を下ろすタイミングが悪いと新婦の手を打つ。餅を搗くのは二人がよく粘るようにとの意味あいがあるのだそうだ。搗いた餅を婚家全員で食べ、残りを持って、新婦の初里帰りに私の父が送つて行く。私は行かない。

途中までバス、四キロ程田舎道を歩いて行つたそうだ。自動車は村内でも殆ど無い時代だった。嫁方の父と酒を酌み交わし、帰りは双方の父親と三人一緒に帰つて来た、帰つて又宴会だ。

その後妻の父親から一本の李（スモモ）の苗を結婚記念に戴いた。妻の父は宮城県紳士録に、円田村（蔵王町）に“桃、大久保と言つ新品种”を導入した先駆者と載つていた。

戴いたスモモも新品种の“BT”で、私の生家の庭先に植えた。そのスモモは生家を建て替えるまで、太い木になり、美味しい果実を沢山実らせて呉れた。

私も妻も、気丈夫で厳格な、双方の優しい両親に育てられ、幸せ者である。